

## 研究ノート

オンライン授業の取り組みと学習成果  
—保育内容「人間関係」と社会福祉学専門ゼミに焦点を当てて—大崎 千秋 安里 和晃  
大森 弘子

## 1. 問題と目的

本研究では、保育内容「人間関係」と社会福祉学専門ゼミに焦点を当てたオンライン授業を実施し、その取り組みと学習成果を明らかにする。具体的には、保育者志望学生が「高齢者をはじめ地域の人との関わり」をテーマにしたオンライン授業（同時双方向型）を受講し、その学習成果と課題を質問紙調査から考察する。また、保育者志望学生を対象に、「新型コロナウイルスと外国人住民：京都市および近郊の事例」をテーマとしたオンライン授業（同時双方向型）の取り組みを紹介する。

周知の通り、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の領域「人間関係」内容の取扱い(6)には、「高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人と触れ合い、自分の感情や意志を表現しながら共に楽しみ、共感し合う体験を通して、これらの人々などに親しみを持ち、人と関わることの楽しさや人の役に立つ喜びを味わうことができるようにすること。また、生活を通して親や祖父母などの家族の愛情に気づき、家族を大切にしようとする気持ちが育つようにすること。」と記されている。

しかし、これは子どもだけのことでよいのであろうか。核家族化や都市化により、子どものお手本となる保育者が、高齢者をはじめ地域の人々との人間関係が稀薄になっている。したがって、養成段階の保育者志望学生には、高齢者の声を傾聴しながら高齢者を理解したり、高齢者と子どもとの交流の機会を設けたり、地域に住む外国人住民の生活を理解したりする経験が必要となる。

養成段階に目を向けるならば、我が国の多くの保育者養成校では、2020（令和2）年度から新型コロナウイルス感染拡大への備えとしてオンライン授業を試行している。オンライン授業は始まったばかりであり、オンライン授業に関する具体的な事例や効果測定はまだ十分に整備されていない。

他方、アメリカでは、すでにオンライン授業が積極的に行われており、Zhaoら（2005）は学習成果について、（オンライン授業のような）遠隔授業と対面授業の間に有意差がないと報告し、Koller（2012）はオンラインが学生の交流を広く深いものにする다고述べている。そこで、保育内容「人間関係」と社会福祉学専門ゼミにおいて、直接対面授業と同等の質を担保しつつ、高齢者の声を代弁できる介護学・保育学の専門家（第一筆者）と、経済学（多文化共生）の専門家（第二筆者）によるオンライン授業（同時双方向型）を実施することとした。

## 2. 保育内容「人間関係」におけるオンライン授業の取り組み

### (1) オンライン授業のねらい

現在、新型コロナウイルス感染症終息の見込みは立っておりず、保育者志望学生の学びの機会を確保するため、オンライン授業の併用について考察していく必要がある。保育者志望学生がオンライン授業によって学習成果を高めることができるならば、これを導入した授業を展開し、学習効果を検討することは、極めて有用性が高いと考えられる。

### (2) オンライン授業の概要

本調査の対象となる授業は、近畿圏のA大学において前期の2020（令和2）年4月～7月に開講している「保育内容（人間関係）」である。授業の概要は、子どもの人と関わる力の育成のための保育者の役割を理解し、事例検討およびグループ討議を通して、幼児教育における子どもの人と関わる力の育成のための保育内容の指導法を実践的に身に付けることである。調査対象は、保育者志望学生22名であった。

保育者志望学生と教員および保育者志望学生同士が非直接対面のGoogle Meetによるオンライン授業（同時双方向型）を実施した。なお、開講期間中に12回のオンライン授業（同時双方向型9回・オンデマンド型3回）、および3回の通信教育型授業が行われた。本研究では、第10回「保育者・地域の間関係と連携」であり、事例検討を通して、A大学がある近畿圏より遠方に住むゲスト講師から学ぶ授業を実施した。この内容は、①子どもと高齢者（施設の一体化）の紹介、②高齢者をはじめ地域の方々との関わり、③認知症の理解と食事介助方法の体験、④共感しあう体験から学ぶ、の4点から構成されていた。図1にオンライン授業（同時双方向型）の様子、図2と図3にオンライン授業の内容の一部を示した。

オンライン授業（同時双方向型）を通して、ゲスト講師は、「子どもが高齢者との関わり

る場所が喪失した家族に代わって保育者には、子どもと高齢者との出会いの場を意図的に作ることが求められている。」「高齢者の智恵や得意とするスキルや趣味の見聞、人生の体験談を聞いたり尋ねたりする関わりを通じて、子どもは、高齢者への認識や行動についての理解を育てる。」「高齢者は、子どもとの関わりが生きがいに寄与したり、愛する我が子への昔の子育てを思い出したりすることにもなる。」などを保育者志望学生に伝えた。



図 1 オンライン授業 (同時双方向型)の様子



図 2 オンライン授業の内容①



図 3 オンライン授業の内容②

### 3. 保育内容「人間関係」におけるオンライン授業の学習成果

#### (1) 質問紙調査

保育者志望学生がオンライン授業をいかに評価するかを測るために、調査用紙を準備した。具体的には、実習前の保育者志望学生(3年生)に、授業評価と感想を求め、KH Coderによる分析を行った。調査用紙の回答は無記名であり、調査用紙の具体的な内容は、

①学びの自己評価（「かなり理解している」「ある程度理解している」「どちらともいえない」「あまり理解していない」「ほとんど理解していない」の5段階評点（5～1点）、②ゲスト講師によるオンライン授業で何を学んだのかの感想（自由記述）、であった。

保育者志望学生には、データは全て統計的に処理し、個人を特定することはないことを伝え、同意を得た上で調査を実施した。調査実施に関わる配慮は、保育学研究倫理ガイドブック（2010）の倫理基準に準じた。

## （2）オンライン授業の評価

学びの自己評価は、（5点満点中）平均値 4.42（標準偏差 0.57）であり、かなり高い評価でばらつきが小さかった。

## （3）オンライン授業の結果と考察

オンライン授業（同時双方向型）の感想でどのような言葉が多く出現しているかを可視化するため、KH Coder（Ver. 3）（樋口，2014）による分析を試み、使用言語の内容と使用頻度に関する分析を試みた。総抽出語数は3,878語であり、出現回数が多い順に、「子ども」「高齢」「思う」「人」「自分」「出来る」「認知」「介護」「一緒」「障害」などが示された。また、出現回数8以上を目安に「共起ネットワーク」の検討を行った。図4には、オンライン授業（同時双方向型）感想の共起ネットワークを示した。連像図では、「子ども」「高齢者」「障害」との共起関係が強い。動詞に注目すると、「思う」「出来る」「関わる」「知る」などと共起関係が強く、独自の語として「待つ」「関わり」「一緒」という保育者の支援が示された。また、授業後の感想から、保育者志望学生は、人の役に立つ喜びについて考えたり、施設にいる祖父を思ったり、認知症の祖母に優しくしたいと考えたり、生活の上での相互の役割についての気づきを示された。保育者志望学生は、「子ども」「高齢」という言葉を経由して産出された創造する心の豊かさがあり、オンライン授業への自己評価の高さと相まって、家族の愛情に気付き、家族を大切にしようとする気持ちが育つことに繋がっているのであれば、本オンライン授業の取り組みが学習成果を示していると言える。

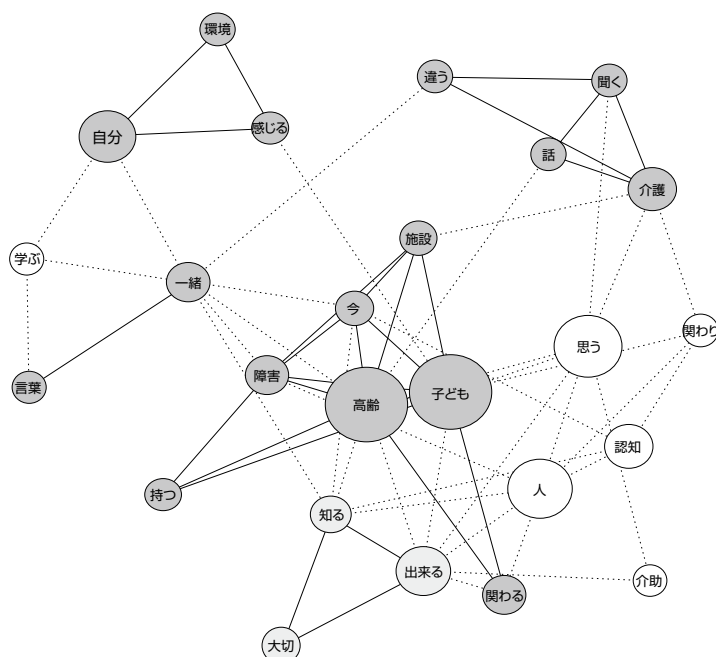


図 4 オンライン授業（同時双方向型）感想の共起ネットワーク

#### 4. 社会福祉学専門ゼミにおけるオンライン授業の取り組み

##### (1) オンライン授業の概要

本調査の対象となる授業は、近畿圏の B 大学において前期の 2020（令和 2）年 4 月～7 月に開講している「社会福祉学専門ゼミ」である。授業の概要は、対人援助に関する基本的な方法や法制度について学び、乳幼児期から高齢期までの生活課題に関する援助のあり方に求められる豊かな人間性を育むこと、また、生活の困難さと背景を理解する力を身に付けると共に、他者理解・自己理解を深めることである。オンライン授業（同時双方向型）実施時期は 2020（令和 2）年 7 月 3 日と 7 月 10 日の 2 回、授業対象者は保育者志望学生（2 年生）13 名であった。オンライン授業（同時双方向型）を実施した。

##### (2) オンライン授業の結果と考察

「書く力を涵養する」というテーマで、2020 年 7 月に 60 分の講義を 2 回実施した。1 回目は、それほど主張があるとは思えないバッターが素振りをしているビデオを見てもらい、それについて自由にできるだけたくさんのことを記述するという形で課題を与えた。出題の意図は、あえて主張の少ないビデオを観察し、解釈し、ストーリーを組み立ててもらうという点であった。何か正解があるに違いないという強い仮説から自身を解放し、多様な

解釈の余地を持たせた形で表現をしてもらいたかったからである。

当初、学生からの回答として想定していたのは、etic と emic の記述だった。Etic とは、物理的な細かい記述である。例えば、「茶色の細かい土の上で金属製のバットを 5 秒間隔で振っている男子学生が、脇を 30 度に閉じて 7 回ほど素振りをした」というような記述である。もう一つの emic とは意味解釈の記述である。例えば、「彼が短い間隔でバットを振っていたのは、前日に失恋したからだ」といったようなものである。物理的であろうと、意味世界であろうと、まずは書いてみるという機会が必要だ。

その結果、「それほど主張があると思えないビデオ」だからこそ、記述は千差万別となった。書けないと話す学生もいたが、いろんな角度から質問を投げると、それなりの答えが返ってきた。数回問答して答えをつないでいけば、それなりに長い記述になっている。書けない学生も実はビデオから感じ取っていることが豊富にあるということだった。また、多様な記述や解釈は、それぞれにとっての「真実」は一つではなく、多様に存在することを意味するものでもあった。中には絵で表現する学生もいて、筆者の想像を上回る回答が出てきた。絵で表現する芸術や論理で表現する学術など、表現は多岐にわたるという点を強調した。

書けないと言っていた学生の感想文をいくつか取り上げてみよう。

「何かを発想したり、ひとつの事柄からたくさんのことを考えるのは苦手だと感じていたけれど、意外と自分で苦手意識を持っていただけなのかもしれないと思えた授業でした。」「何気ない動画の中にも、事実として捉えられることがたくさんあり、その事実から自分が推測することで、新たに見えてくることがあるということ学びました。また、私は授業で言ったように、何かを見てそこから自分なりに読み取ったことや、考えたことを文章にして書き出すということが、どちらかという苦手なのですが、授業で、先生に自分の回答に対して、様々な質問を投げかけてもらって、その質問に対して返した答えが無意識のうちに、自分の頭の中で考えていることなんだと気づきました。実は、私自身が気付いていないだけで、何かしら読み取ったことや考え、推測などをしっかり持っているんだと感じ、驚きました。以前は『何を書くのが正解なんだろう』ということを考えながら書き起こしていましたが、そうではなく、まずは自分の感じ取ったことをそのまま文字に書き出していくことが大切なんだということ学びました。」「映像をみて感じたことを多くの方が言語化しており、細部までよく見ているんだと感じました。また、私は他の人と違って感じたことを言葉ではなく色で表現したのですが、そのとき先生が受容的な姿勢で接して下さったことで、大切なのは素直に感じてありのままを外に出すことであ

り、言葉や色等の表現方法はアウトプットの補助にすぎないのだと学びました。」

第2回目の授業では、コロナ禍における外国人住民の収入の変化に関するデータを見てもらった。これはデータを見て考えてもらい、論理で表現してもらうことが目的であった。資料は第二筆者が調査をした、外国人住民のコロナ前後における収入の変化に関する表であった。収入が雇用形態（正規、非正規の別）、在留資格、職種、国籍、年齢、ジェンダーといった属性別にどう変化しているのかを検討するものである。収入の変化を指摘すると同時に、どうしてそうなるかという解釈が求められた。第1回目のビデオと異なり、着眼点は比較的絞られている。変化を読み取ることと、それを解釈するという2段階構成であったが、特に後者はそれほど容易ではない。解釈のためにはそれなりの背景を理解する必要があるからである。

回答を紹介すると、「外国籍の方で、アルバイトとして働いていた人の収入の変化が、正社員・派遣の形態に比べて割合が大きいことから、アルバイトは他の形態に比べて、シフトが削られたり解雇されたりすることが多いのかなと考えた。業種のところを見ると、食品製造・興行・ホテル・飲食・自営業などの、いわゆる接客業や食品の製造業にあたる職に就いていた人たちの収入が約50%以上減少していることから、医療福祉・教育系の職業に比べて、大きくネガティブな影響を受けていると考えた」、「二つ目の表（不安に思うこと）より、アルバイトなど不安定な収入を得る留学生にとっては生活費の不安が大きいことや、反対に、高度人材や福祉医療職などは生活費の不安はそこまで高くないことが分かる。留学生にとって、オンライン授業になることで、パソコンやネット環境が必要となるため、不安を感じる人が多いのだと思う。他にも、技能実習の出身国の家族の不安が大きいことと、孤立で不安に思っていることには関係がありそうだと想像する」。

この2つの作業では、etic, emicを問わない自由な記述（表現）と論理に基づく記述を取り上げたが、感想文からも表現形態を相対化する経験であったようだ。こうした作業を繰り返すことで、表現スタイルを身に付けていくものと考えられる。

## 5. 総合考察と今後の課題

本研究では、オンライン授業（同時双方向型）を実施した。学習効果について保育者志望学生は、高い学習成果を示し、子どもと高齢者との関わりの中での保育者の支援が示された。オンライン授業（同時双方向型）において学習の効果を上げることは可能である。幼児教育における子どもの人と関わる力の育成のため、オンライン授業（同時双方向型）

の画面を通じ同じ空間を共有して、今後もこのような授業形態は拡大していくことになるだろう。

しかし、直接対面授業との比較に至っていない。また、オンライン授業（同時双方向型）で実施する際の留意点を検討していく必要がある。そこで、今後も発展するオンライン授業のさらなる検証を今後の課題としたい。

## 6. 文献

1. 樋口耕一. 2014 社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して 15 ナカニシヤ出版.
2. Koller, D. 2012 オンライン教育が教えてくれること (TED Talks).  
[https://www.ted.com/talks/daphne\\_koller\\_what\\_we\\_re\\_learning\\_from\\_online\\_education](https://www.ted.com/talks/daphne_koller_what_we_re_learning_from_online_education). (2020年7月18日閲覧)
3. 厚生労働省. 2017 保育所保育指針 フレーベル館.
4. 文部科学省厚生労働省. 2017 幼稚園教育要領 フレーベル館.
5. 内閣府・文部科学省・厚生労働省. 2017 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 フレーベル館.
6. 日本保育学会理倫綱領ガイドブック編集委員会（編）. 2010 保育学研究倫理ガイドブック 1-96 フレーベル館.
7. Zhao, Y., Lei, J., Lai, C., & Yan, B. 2005 What Makes the Difference? A Practical Analysis of Research on the Effectiveness of Distance Education, Teachers College Record, 107(8), 1836-1842.

### 【謝辞】

本研究を実施するにあたり、調査にご協力いただきました保育者志望学生の皆様にご協力をいただきました。心より感謝を申し上げます。

### 【付記】

本研究の一部は、日本乳幼児教育学会第30回大会で発表したものである。



## The Contents and Performance of Online Class in Nursery Focusing on “Human-Relations” in a Special Seminar

Osaki, Chiaki\* Asato, Wako\*\* Ohmori, Hiroko\*\*\*

コロナ感染拡大防止のため多くの大学では、オンライン授業の取り組みを試行しているが、オンライン授業に関する具体的な事例や効果測定はまだ整備されていない。そこで本研究では、保育内容「人間関係」と社会福祉学専門ゼミにおいて、介護学・保育学や経済学（多文化共生）の専門家から、他者理解するための方策や交流を学ぶことのできるオンライン授業（同時双方向型）の実施を試みた。その結果、以下の2点が示された。

- 1) 保育内容「人間関係」のオンライン授業によっても、家族を大切にしようとする気持ちが育つことが示された。
- 2) 社会福祉学専門ゼミにおいて、オンライン授業で自由な記述（表現）と論理に基づく記述を取り上げ、表現形態を相対比する作業を繰り返す経験が、表現スタイルを身に着けていくものとする。

以上の結果を踏まえ、オンライン授業（同時双方向型）の取り組みと一定の効果をもたらしたものの、実施する際の留意点を検討していく必要がある。今後の課題はオンライン授業のさらなる検証である。

キーワード：オンライン授業, 保育内容「人間関係」, 社会福祉学専門ゼミ, 学習成果

---

\* Nagoya Ryujo Junior College

\*\* Kyoto University

\*\*\* Bukkyo University

